

【ポスター発表】

グループバリデーション実践による認知症高齢者への効果(1)

○ 関西福祉科学大学 都村 尚子 (3861)

家高 将明 (関西福祉科学大学・7811) 三田村 知子(関西女子短期大学・8727)

米澤 美保子 (神戸親和女子大学・7409)

キーワード：バリデーション、認知症高齢者、感情反応評価尺度(PRS)

1. 研究目的

わが国は世界で最も速い速度で高齢化が進み、同時に認知症高齢者も激増している。2002年に厚生労働省が発表した『将来推計』では2015年に認知症高齢者は約250万人と予想されていた。しかし、2013年6月には462万人と発表された(厚生労働省2013*¹)。

このように増え続ける認知症高齢者への支援は2000年の介護保険制度施行以降、高齢者福祉分野における最重要課題の一つと捉えられており、2012年2月17日に発表された「社会保障・税一体改革大綱」においても重点課題と位置づけられている。

しかし高齢者福祉の現場では、新型特別養護老人ホームやグループホームなどが整備されるなど、ハード面やサービス供給量の問題は明らかに改善されているものの、肝心の提供されるケアは国の目指す「“その人らしい”生活を支える」や「地域包括ケアの確立」という理念を反映するに至っていない。

では、このように認知症ケアにおいて、十分に質の高いサービスが提供されていない主な原因はどこにあるのか。それは、認知症高齢者のコミュニケーション力の欠如がケアの最大の障害となっていることにある。

このようなことから、認知症高齢者とのコミュニケーション法である「バリデーション」の活用による効果が期待される。しかしながら、バリデーションの効果に関する実践的研究の蓄積は十分になされていないことから、エビデンスを蓄積していく必要があると考える。

2. 研究の視点および方法

本研究では、特別養護老人ホーム4施設において、入居している認知症高齢者を対象に、グループバリデーション実施群(以下GV群)と、実施していない群(以下C群)それぞれに対してPRS(Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale)による調査を実施した。調査を実施した地域、グループバリデーション(以下GV)実施時期、人数はそれぞれ、香川県2013年6月～9月7名、富山県2013年6月～9月9名、兵庫県2013年6月～10月25名の合計41名である。GVは1グループ4～5名、1回30～45分を週1回、計10回実施した。GVの効果測定するために、GV実施前(2013年6月)と、実施後(2013年9月あるいは

10月)にPRSによる調査を実施した。分析対象者は、調査対象者から欠損値を除いた37名である。その内訳は、GV群が21名、C群が16名であった。なお、本研究はJSPS科研費25510020の助成を受けて実施した。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の倫理規定に基づき、関西福祉科学大学倫理審査委員会の承認(No. 13-08)を受け実施した。

4. 研究結果

GV群、C群それぞれにおける各人のPRSの評価項目「楽しみ」「怒り」「不安・恐れ」「抑うつ・悲哀」「関心」「満足」(「怒り」「不安・恐れ」「抑うつ・悲哀」については、評価得点を逆転)の得点(各1-5点)を合計し、GV実施前後の得点差をみた。分析方法は、Wilcoxonの符号付き順位検定を行った。有意水準は $p < 0.05$ とした。統計解析はIBM SPSS Statistics20を用いて行った。検定結果は、GV群におけるGV実施前PRS得点(中央値)は21.0点、実施後が28.0点で有意に増加($p < 0.05$)した。またC群においては、PRS点(中央値)が17.5点から21.0点に変化したが、有意差は認められなかった。

5. 考察

本研究において認知症高齢者に対するバリデーシンの効果を検証するため、GV群及びC群それぞれにおける変化をみた結果、GV群に有意な変化が認められた。この結果は、先行研究の結果と一致する(都村ほか, 2013^{*2})。

このようにGV群のみにPRS得点に向上がみられたのは、この技法により認知症高齢者とのコミュニケーションが成立し、心的交流が可能になったためと考えられる。その主要因は、認知症高齢者を徹底して受容しつつ、感情レベルに焦点をあてるバリデーシンの実践によるものだと考えられ、この技法は認知症高齢者の支援に有用であると考えられる。

今回、本研究は施設入所している認知症高齢者を対象にバリデーシンによる介入効果を検証した。今後は実証性をさらに高めていくために、在宅で暮らす認知症高齢者を対象とした検証も実施していきたいと考える。

<引用文献>

*¹ 朝田隆ほか(2013年)「都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応」厚生労働省科学研究費補助金認知症対策総合研究事業、平成23年度～平成24年度同号研究報告書

*² 都村尚子ほか(2014年)「認知症高齢者における感情表出に関する研究ーバリデーシンを活用してー」第4回総合福祉科学学会報告抄録集 p. 11

グループバリデーション実践による認知症高齢者への効果(1)

キーワード: バリデーション、認知症高齢者、感情反応評価尺度(PRS)

都村尚子(関西福祉科学大学 3861)

家高将明(関西福祉科学大学 7811)

三田村知子(関西女子短期大学 8727)

米澤美保子(神戸親和女子大学 7409)

1. 研究目的

増加の一途をたどる認知症高齢者への支援は
高齢者福祉分野における最重要課題の一つ

高齢者福祉の現場

改善

ハード面: 施設整備、供給量の充足

未確立

ソフト面: 質の高いケアの実現

【最大の障害】

認知症高齢者の

コミュニケーション力の欠如



本人の主訴の
把握が困難

認知症高齢者のコミュニケーション力の欠如

認知症高齢者の思いをより正確に理解するためのコミュニケーション法である「バリデーショ」の活用が有効であると期待される

<課題>

認知症高齢者へのバリデーショの有用性に関するエビデンスの蓄積

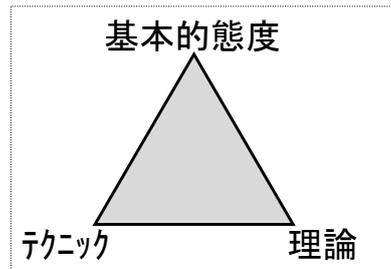
本研究では、認知症高齢者のバリデーショ導入による効果の検証を目的とする。

バリデーショとは…

認知症高齢者とのコミュニケーションを通して感情レベルに訴える方法論



ナオミ・フェイル
バリデーショ創始者。
バリデーショトレーニング協会 専務理事。



バリデーショのゴール

- ・お年寄りの感情・欲求を表出させる。
- ・人生の未解決問題解決への手助けをする。

➡ 「コミュニケーション」
そのものがゴール

グループ・バリテーションの概要

<実践方法>

- ・週に1回、同じ時間、同じメンバー、同じ場所で行う。
1回につき30分前後、3ヶ月間継続して行う。
- ・認知症高齢者(4名前後)、バリテーション・ワーカー(1名)、サブリーダー(1~2名)

<プログラム>

オープニング → 開会の歌 → ミーティング
→ アクティビティ → お茶の時間
→ 閉会の歌 → クロージング

実践の一場面



ミーティング



お茶の時間



アクティビティ

2. 研究方法

- **調査期間** 平成25年6月～10月
- **調査対象** 特別養護老人ホーム 4施設
(香川県1施設、富山県1施設、兵庫県2施設)
施設入所者 計41名
性別: 男性:5名、女性:36名
CDR:0.5～3
- **調査方法** グループバリデーション実施群、実施していない群に分け、バリデーションを週に一度、それぞれの対象者に実施した

- **倫理的配慮** 調査に際し、研究目的、方法、個人情報管理方法を説明し、施設・家族・本人の同意を得た。なお、日本社会福祉学会の倫理規定に基づき、関西福祉科学大学倫理審査委員会の承認 (No13-08)を得て実施。
- **測定方法** 介入前後における認知症高齢者の感情状態をPRS (Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale)を用いて測定
- **分析方法** Wilcoxon符号付順位検定を行った

3、研究結果

表1 認知症高齢者のPRS得点(中央値)

	介入あり群		介入なし群
研修前	21.0	} **	17.5
研修後	28.0		21.0

Wilcoxonの符号付き順位検定 ** : P<.01 * : P<.05

◎介入前後におけるPRS得点

1、グループバリデーション実施群

得点が有意に増加した

(怒り、不安・恐れ、抑うつ・悲哀が低下し、
楽しみ、関心、満足が向上)

2、実施しない群

得点は増加したが

有意な差は認められなかった

※先行研究(都村ほか2013)と一致

4、考察

- グループバリデーション実施群にのみ反応がみられたのは、この技法によりコミュニケーションが成立し、心的交流が可能になったためと考えられる。

【主な要因】

バリデーションの実践によって、認知症高齢者を徹底的に受容しつつ、感情のレベルに焦点をあてたことによるものではないか

- 本研究では、**バリデーションが認知症高齢者の支援に有用性が認められるのではないかと考える。**

今後の課題

- 実証性をさらに高めていくために、在宅で暮らす認知症高齢者を対象とした検証を実施していきたい。

※本研究は平成25年度科学研究費助成事業 基盤研究(C)(承認番号25510020)により実施された。